



東京女子医科大学学術リポジトリ  
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>

## (会長講演)臨床の場で共有してもらいたいこと:社会科学の視点から

著者名	諏訪 茂樹
雑誌名	東京女子医科大学看護学会誌
巻	14
号	1
ページ	31-33
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/00032263">http://hdl.handle.net/10470/00032263</a>

## 臨床の場で共有してもらいたいこと：社会科学の視点から

諏訪 茂樹（東京女子医科大学看護学部）

これまでの看護師養成テキストでは、コミュニケーションが重要な学習項目として扱われてきました。ところが、大半の教科書が、メッセージ、送り手、受け手、言語、非言語などと、コミュニケーションの構成要素の説明から入っており、学習者の学習意欲を最初から低下させる魅力のない内容となっていました。

コミュニケーションの本来の意味は、メッセージをやり取りして共有することです。したがって、コミュニケーション学習の第一の課題は、いかに正確にメッセージを共有するかなのです。私たちは、言語（言葉）だけにとらわれるのではなく、言語に伴う準言語（語調など）や非言語（表情、視線、目線、動作、姿勢など）にも注意を払いながら、患者・利用者からのメッセージを正確に受け取ろうとしなければなりませんし、自分のメッセージが正確に伝わるように努力する必要があります。

ただし、コミュニケーションはメッセージを共有するだけで、終わるわけではありません。共有されたメッセージは、その送り手や受け手に様々な影響を及ぼすのです。そこで、まず、自分のメッセージが患者・利用者に及ぼす影響について十分に理解したうえで、言葉を選ぶことが必要となります。これまでの研究では、自分本位で指示的、命令的、否定的なメッセージは患者・利用者に不快感を与えるという、当たり前の結果が確認されています。患者・利用者本位になり、ちょっとした気づかいや心配りのメッセージを伝えたり、肯定的なメッセージを伝えたりすることが望まれるのです。

このことは、自己犠牲による患者・利用者への一方的な献身を、看護師に求めるものではありません。看護師の利益か、患者・利用者の利益かという、二者択一の問題ではないのです。多くの看護師や看護学生が、患者・利用者の役に立ちたいという向社会的な動機からも、看護師を目指したはずで、そのために、患者・利用者本位の看護を実践して効果が得られると、仕事の醍醐味を味わうことができるのであり、看護師としての自己実現につながるのです。

つぎに、患者・利用者からのメッセージの共有について、考えてみたいと思います。医療社会学や医療人類学の分野では、人々による病変の主観的な体験を病（illness）と呼ぶことにより、客観的事実である身体の疾患（disease）と区別してきました。看護もサイエンス（科学）であり、アート（芸術）だと言われます。つまり、万人に共通する法則に基づきながら疾患に対応するだけでなく、一人一人にとっての唯一無二な病と向かい合うことも、看護なのです。そこで、看護師は哲学、心理学、社会学、文化人類学など、社会科学も幅広く学んできたわけですが、大切なのは単に知識をたくさん持つことではなく、それらを病の理解に活かし、アートとしての看護実践につなげていくことです。

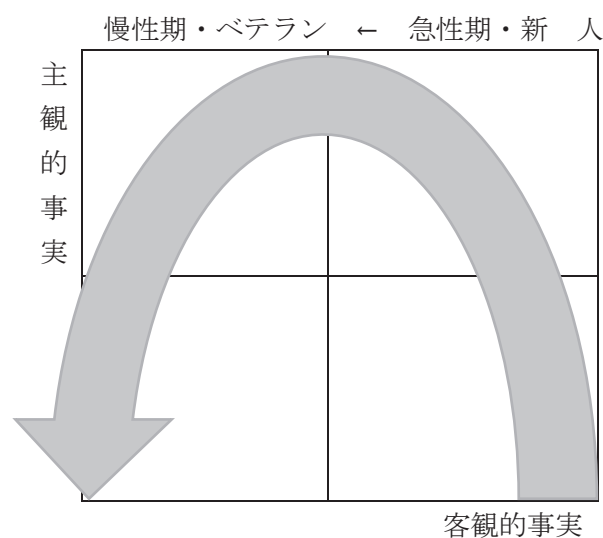
他方で、このようなスタッフの看護実践を通して、看護管理職も看護をしていると言えます。そのために、スタッフ—管理職間のコミュニケーションでは、業務改善や資格取得や看護研究などの二次的事柄だけではなく、何よりも患者・利用者への看護実践そのものを共有しなくてはなりません。それと同時に、看護師は看護マシンではなく、患者・利用者と同様に意識も意思も感情も持つ生身の人間です。そのために、働きがいや職場満足などの主観的事実も共有しなければならず、もしもそれ

ができなければ、スタッフが定着しない不安定な職場となるでしょう。

これかあれかの二者択一ではなく、これとあれの使い分けが 21 世紀のパラダイムだと言われています。客観的事実か主観的事実かではなく、どちらもなのです。しかも相手の状況に応じて、両者をうまく使い分けるスキルを身につけることが、何よりも大切です。

これまでの使い分けモデルに従うと、初期段階では、まず、客観的事実の共有が特に重要となります。ただし、それだけでは息が詰まり、長続きしません。そこで、徐々に主観的事実の共有へと比重を移していき、やがてそれも減らして、最終的には自立してもらうことになります。

コミュニケーションは、単に情報を伝達する手段ではありません。人と人との全人的にメッセージを共有しながら、共に生きていくことであり、それによってコミュニティが実現されるのです。



図：使い分けモデル

最後に、よく質問される問題について、触れておきたいと思います。それは、コミュニケーションや対人関係が極端に苦手な人たちと、どのように接すればよいのかという問題です。

2012 年に発表された文部科学省のデータによると、通常学級に在籍する小学生の 7.7%、つまり約 15 人に 1 人に、発達障害もしくはそれが疑われるとのこと。そうすると、「発達障害は本当に病気なのか」「単なる個性ではないのか」という疑問が湧いてきます。そして、思い出されるのが、ぶっきらぼうで無口ながら、コツコツと仕事をする職人の存在です。

職人が担ってきたモノづくりはマニュアル化・オートメーション化され、人件費の安い海外で行われるようになりました。そして、対人関係能力が求められるサービス業へと産業構造の中心が移行する過程で、「発達障害」という言葉が使われるようになり、受診件数も増えて行ったのです。

人は本来、多様な存在です。したがって、儲かる産業で高業績を収めた人を模範にするコンピテンシー（能力・適性）教育だけでは、どうしても限界があります。儲けだけではなく、人間も大切にする社会を目指して、多様性を前提にして相互理解と共存を目指す教育へと、比重を移していくことが求められると考えます。

## 引用文献

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2012）．通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について．[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm)（2018年6月1日閲覧）

## 参考文献

諏訪茂樹（2010）．対人援助とコミュニケーション 主体的に学び、感性を磨く、第2版．中央法規出版（東京）．

諏訪茂樹（2011）．看護にいかすリーダーシップ 第2版 ティーチングとコーチング、場面对応の体験学習．医学書院（東京）．

諏訪茂樹（2012）．コミュニケーション・トレーニング 人と組織を育てる 改訂新版．経団連出版（東京）．